

小説『ノルウェイの森』における登場人物の精神分析
—ジークムント・フロイトの精神分析学を通しての一考察—

要旨

アストリ・クルニアワティ

0742019



マラナタキリスト教大学

文学部

日本文学科

バンドン

2011

序論

グロス (1996, 25) によると、「心理学とは心と行動についての学問である。心理学の目的は、成人の意識を分析することである。」と述べている。

心理学の中に、いわゆる精神分析理論がある。ジークムント・フロイトは、神経病理学者を経て精内科医となり、今日では、精神分析の創始者と言われている。

フロイトの精神分析学には二つの基本的な定義がある。一つはイド、自我、超自我からなる人格構造である。もう一つは本能と不安からなる人格の力学である。

まず、人格構造について以下に示す。

1. イドとは、最も基本的な人格構造であり、本能的な性質を持つ人格機能である。イドは個々の無意識の部分であり、善悪の判断をすることなく、利己的な欲望でのみ行動する。
2. 自我とは、外界からの刺激を調整する人格機能である。
3. 超自我とは、道徳観や社会的な規則を自我に伝える人格機能である。

次に、人格の力学について以下に示す。

1. 本能とは、緊張と覚醒の心理状態を描写するものである。本能には生の本能と死の本能がある。生の本能とは、飢え、渇き、

性欲などの生存を保持し強要するものである。死の本能とは、既に存在するものの破壊に向けられているものである。

2. 不安とは、人格の力学において重要な構成要素として考えられる葛藤から抑圧するものである。

本研究では、ジークムント・フロイトの精神分析学を通して小説『ノルウェイの森』に登場する人物の人格を精神分析していく。

小説『ノルウェイの森』は1987年に出版された村上春樹の作品である。この小説は、様々な葛藤や人間模様、恋愛、喪失感などを描いている。具体的には、主人公のワタナベトオルを語り手に20年前の大学生話を振り返るものである。

この小説の中に出てくる三人の主な登場人物の人間関係と、それぞれの人格について以下に説明する。

1. トオルは、キズキと直子という友人を得て以来、孤独を感じなくなっていく。トオルは、学生時代二人の女性（直子と学友）と恋愛関係を持つが初恋の相手が直子であった。しかし、直子に対してのトオルの恋愛感情は一方的なものであった。直子への気持ちが報われないと感じたトオルは、フリーセックスとアルコールに溺れていく。

トオルは、社交的ではなく、内向的で、ハイパーセックス人間として描かれている。

2. キズキは、トオルの高校時代の同級生で唯一の親友であった。

キズキは、社交的で、面白い人物として描かれている。

3. 直子は、キズキの幼馴染みで恋人だったが、キズキの死により精神的に弱くなり落ち込んだ状態が続く。直子は初めトオルと友達であったが、キズキの死後、トオルの恋人になった。

直子は、社交的ではなく、内向的で、恥じらいの気持ちを持った人物として描かれている。

本論

ここでは小説の中に出てくる、具体的な場面を二つ取り上げ説明していく。

まず、大学で、トオルが直子と出会った時の場面である。

僕にはキズキという仲の良い友人がいて（仲が良いというよりは僕の文字どおり唯一の友人だった）、直子は彼の恋人だった。

(P. 47)

この場面から、トオルは内向的な性格であるとわかる。トオルは、人生に悪影響を及ぼす可能性のある自身の性格を自覚せず、孤独に感じている。

精神分析学において、トオルはイドが超自我より強いため、自我が正常に機能していないとされる。イドの存在により、善悪を判断せず、快楽原則で行動していると考えられる。

次に、キズキの死後、直子は鬱病になり、直子とトオルが会話をしている時の場面である。

「それは本当に —— 本当に深いのよ」と直子は丁寧に言葉を選びながら言った。… …「でもそれじゃ危くってしようがないだろう」と僕は言った。… …「あまり良い死に方じゃなさそうだね」と僕は言った。… …「ひどい死に方よ」と彼女は言って、上着についた草の穂を手で払って落とした。

(PP. 13 - 14)

この場面から、直子の弱さが明白に表されており、彼女自身それに絶望し、自殺しようとする。しかし、結局彼女は自殺は情けなく何の解決にもならないと悟った。

精神分析学において、このことは死の本能いわゆる自殺に行為に結び付くとされる。フロイトは、全ての人間は自身の中に死の本能を持っており、死の本能は不安、絶望、精神的外傷を感じる体験をした場合、強く現れると説明している。

結論

小説『ノルウェイの森』をジークムント・フロイトの精神分析学を通して分析した結果、以下の結論に達した。

人間は、自身の中にあるイドの存在により、善悪の判断をせず衝動的な行動をとる。

人間は、自身の中にある自我の存在により、イドと超自我を区別する。そして、自我は、イドと超自我の要求を調整し、内面と外界とを区別する。また、自我は快を求めるイドの要求を促す一機関である。

人間は、自身の中にある超自我の存在により、善悪を判断する。そして、超自我は、正常な精神状態を築けるようにイドと自我を抑圧する。

本能とは、人格を刺激する要因である。行動をうながすだけでなく、直面する行為に対しての方向性をもうながす。本能は人間にとって必要なため、存在する。また、他者の要望を満たすために働く。

生の本能は、活力と生存をうながし、自身にとって悪い結果とはならない。

死の本能は、自殺、虐待、殺害のように自身または他者の精神と肉体を破壊する行為をうながす。

以上、人格構造と人格の力学より、人間の人格は、経験により生み出されると考えられる。すなわち、いい経験はいい人格を生み、悪い経験は悪い人格を生むとされる。

DAFTAR ISI

	Halaman
Kata Pengantar	i
Daftar Isi	iv
 BAB I Pendahuluan	
1.1 Latar Belakang Masalah	1
1.2 Pembatasan masalah	4
1.3 Tujuan Penelitian	4
1.4 Metode dan Pendekatan Penelitian	5
1.5 Organisasi Penulisan	6
 BAB II Tinjauan Umum Terhadap Novel “Norwegian Wood” dan Psikoanalisis Sigmund Freud	
2.1 Perkembangan Psikologi Kepribadian	8
2.2 Teori Psikoanalisis	13
2.2.1 Struktur Kepribadian	14
2.2.1.1 Id	15
2.2.1.2 Ego.....	16
2.2.1.3 Superego	18
2.2.2 Dinamika Kepribadian	19
2.2.2.1 Naluri (Insting).....	20
2.2.2.1.1 Naluri hidup	21
2.2.2.1.2 Naluri mati	22

2.2.2.2 Kecemasan	22
2.3 Pengertian Metode Karakterisasi Telaah Fiksi	24
2.3.1 Metode Langsung (Telling)	24
2.3.1.1 Karakterisasi Menggunakan Nama Tokoh	24
2.3.1.2 Karakterisasi Melalui Penampilan Tokoh.....	25
2.3.1.3 Karakterisasi Melalui Tuturan Pengarang	26
2.3.2 Metode Tidak Langsung (Showing)	26
BAB III Analisis Kepribadian Tokoh Utama	
3.1 Pelukisan fisik dan karakter Toru Watanabe	
3.1.1 Pelukisan fisik Toru Watanabe	27
3.1.2 Pelukisan karakter Toru Watanabe	28
3.2 Pelukisan fisik dan karakter Naoko	
3.2.1 Pelukisan fisik Naoko	40
3.2.2 Pelukisan Karakter Naoko.....	42
BAB IV Kesimpulan	51
DAFTAR PUSTAKA	53
LAMPIRAN TOKOH DALAM NOVEL NORWEGIAN WOOD	vi
SINOPSIS	ix
RIWAYAT HIDUP PENULIS	xv